

はじめに述べたように、本書は平成二十六年（二〇一四）に京都大学総合博物館と京都文化博物館において共同企画した展覧会「日本の表装」の展示関係者のうちで編集を企図したものである。ものの持つ情報や意義を探求する学識者、ものを保管し展観や情報の普及に携わる博物館、ものの適切な保全や修理などを講じる文化財行政、そしてものの価値を次世代に繋ぐべく修理を実施する技術者といった立場を異にする者同士が、毎月仕事後に集まり、過去から現在、そして未来へと継承されていく品々の修理や伝世のあり方について熱心に討議を重ねた。当初は具体的な展示内容についての議論であったものが、問題の重さに引き寄せられるように、展覧会以後の方針や事業についても少しずつ計画を巡らせるようになったのであった。折しも昭和二十五年（一九五〇）に施行されて以来、日本の文化財を護り支えてきた文化財保護法の改正が審議され、文化財保護行政の中心的な役割を果たしてきた文化庁の京都移転計画が具体化し、文化財の活用という語が新たな話題として登場した時である。議論が時宜を得ていたこともあってか、以来こうした問題に関心を持つ多くの方々を支えられ、「日本の表装」図録の一部英語化、そして本書の出版、と少しずつ企画を実現させることが出来た。これら私たちの一連の取り組みに対しては当初の想像以上の反響があり、多くの方々から激励を頂き、また社寺を中心に古い品々を伝えてこられたご所蔵者からも暖かな言葉を賜り、有形無形のご協力も頂戴した。最初の企画がはじまって以来の八年間を振り返るにつけ、関係者のご支援あつたのことと、改めて深甚の御礼を申し上げる次第である。

本書では、絵画や書跡のかたちを支える根本的な技能である表装の歴史やその役割を、出来る限り様々な角度から取り上げた。ここでいう表装には、新規の仕立てのみならず、その後の本紙の維持に必要な修理や改装といった営みが広く含まれており、そこには、ものの伝世を通じて歴史に对峙してきた過去の人々の切実な希求がこの上なく体现されているように思われる。そして表装の形式や趣向、その技術を支える思想は、表装される対象の性格、時代や地域によつて大きく異なる。絵画や書跡を目にするとき、私たちはその本紙と共に表装の多様な形に出会い、さらに改装や修理を加えるときには、その古い表装にも向き合うことになる。展覧会、またそれ以後の調査研究を通じて私たちは関西に残る品を中心に様々な表装に出会ったが、その多様性には驚かされるばかりであった。同時に表装（それらを収納する箱や同梱品なども含めて）が多くの情報を秘め、ときに美術作品や重要な歴史資料そのものであり得るということも、この数年で改めて強く認識された。

今日、茶人やごく限られた愛好家を除いては、表装に目を向けるのはもっぱら書画の作者や表具師をはじめとする一部の美術関係者、そして文化財修理に接する専門家や技術者などに限られていると言つてよい。展覧会に表装についての解説や収納箱・同梱品などが並ぶことはほとんどなく、一般の方々はおろか、歴史や美術の研究者の間においても表装について学ぶ機会は少ない。専門家の間でも表装のもつ位置づけはいくぶん不明瞭で、その扱いは表具師や文化財修理の関係者といった少数の者に一任されてきた節すらある。

かくいう本書の編集に携わった私たちもまた、それぞれ契機を違えつつも文化財修理の世界の一端に触れた者たちであり、修理とそれを支える表装技術のあり方について、それぞれ異なる立場で問題意識を持つて集い始めたのであった。そうした経緯ゆえ、本書ではまず現在の日本の文化財修理の立場を基礎付けてきたこの数十年の歩みを、僅かなりとも記し留めることから始めている。ものの表装と修理はいずれも過去から

続く歴史的な営みであり、現在進行形で進むこの作業を通じて、現代の私たちもまた歴史と向き合っている。いつか過去のものとなる現在の記憶と記録が失われる前に、その情報をなるべく入手しやすい形でお届けすることは、日本の表装と修理のあり方をいつの日か振り返る上で裨益するところがあるかもしれない。また今日、表装と修理を総合的に議論しようとした切実な動機が、私たちの直面する文化財修理の現代的課題のうちから発したことを改めて強調しておきたいと考えたからである。

また一方で私たちの考えるところでは、表装と修理に関する知見はそもそも日本史や美術史をはじめとする様々な学術研究に寄与するところが少なくない。これらは時代の審美眼や文物の流通状況、これに関わる職能者の生業などを総合的に考え得る、文化史上の興味深い素材である。そして時に書跡や絵画の作者自身も、表装における裏打紙の色合いや仕立、表装による荘厳といった要素の意義を重視して制作に励んだのであり、そうした本紙を支える背景に目を向けることは、既存の学術分野におけるものについての理解にも還元される。ただし近世以前の品々において、古い表装がそのままに残っているものは限られ、これを考察するためには丹念な資料批判と併せて、実物の考証が欠かせない。情報が不足している現状では、出来る限り多くの方にこの問題を考えて頂き、情報や知見が公開されていくことが重要であり、ひいてはそれらの蓄積によつて、表装を含めた今日の文化財の取り扱いや修理のあり方も見直されていくかもしれない。

その端緒となればと企図した本書では幸いにして、書画の物理的成り立ちや修理工程、古代中世の仏画表装や中世後期の東山表装、近世前期の宮中や禅林における書画表装、近世寺社における聖教や仏画の修理改装、近代における美術収集の動向と表装事情といった、恐らくは日本の表装史上重要と思われる問題の多くについて、現在第一線で活躍する研究者の論考を収録することができた。執筆者の方々にはご無理を申し上げましたが、表装と修理が時代様式と価値観を備えた歴史的事象である（現代もその例外ではない）ことを明らかに

する上ではいずれも欠くべからざる主題と思われ、これらは通史的に相互に関連して、表装と修理に関する時代ごとの問題の射程を浮かび上がらせてくれる。また各論は個別の文化史としてのみならず、今日の我々が備える表装や修理の価値観を改めて定義する上でも少なくない意味を持つだろう。ただしいずれの分野をとつても未知の事例や記録がなお膨大にあるに違ひなく、再考すべき論点も含めて、今後ますますの議論の深まりを祈念してやまない。

表装は、薄い紙や絹で形作られた脆弱な品々に長い命を与えるべく発達した技能であり、特に日本では階層を問わず、人々が表装を介して無数の品々を伝世させ、歴史の記憶や美を紡いでいる。掛軸や卷子、屏風のような装いの形は今や過去のものになりつつあるが、写真立てや額縁、あるいはアルバムや台紙貼りのように、ものを美しく長持ちするよう仕立てる欲求はまだまだ私たちの身の回りにあり、それは表装の本質と無縁ではない。恐らくそれゆえに表装という営みは、常に社会のあらゆる人々にとつての問題たり得るだろう。本書には修理技術者のほか、日本史や書跡・絵画史研究者に論考を寄せて頂いたが、本書の編集に意義を見出し、刊行を待ち望んでくださった方々の中には、多種多様な分野の研究者もいる。今ようやくここに発刊をご報告できることを心より嬉しく思うとともに、貴重な論考をお寄せいただいた諸氏、各種の調査や写真掲載にご協力いただいたご蔵者をはじめとする関係各位、そして至らぬところの多かつた編集委員の働きを地道に支え、編集の労をとつていただいた勉誠出版、吉田祐輔氏に深謝を申し上げたい。

令和二年三月

編集委員一同